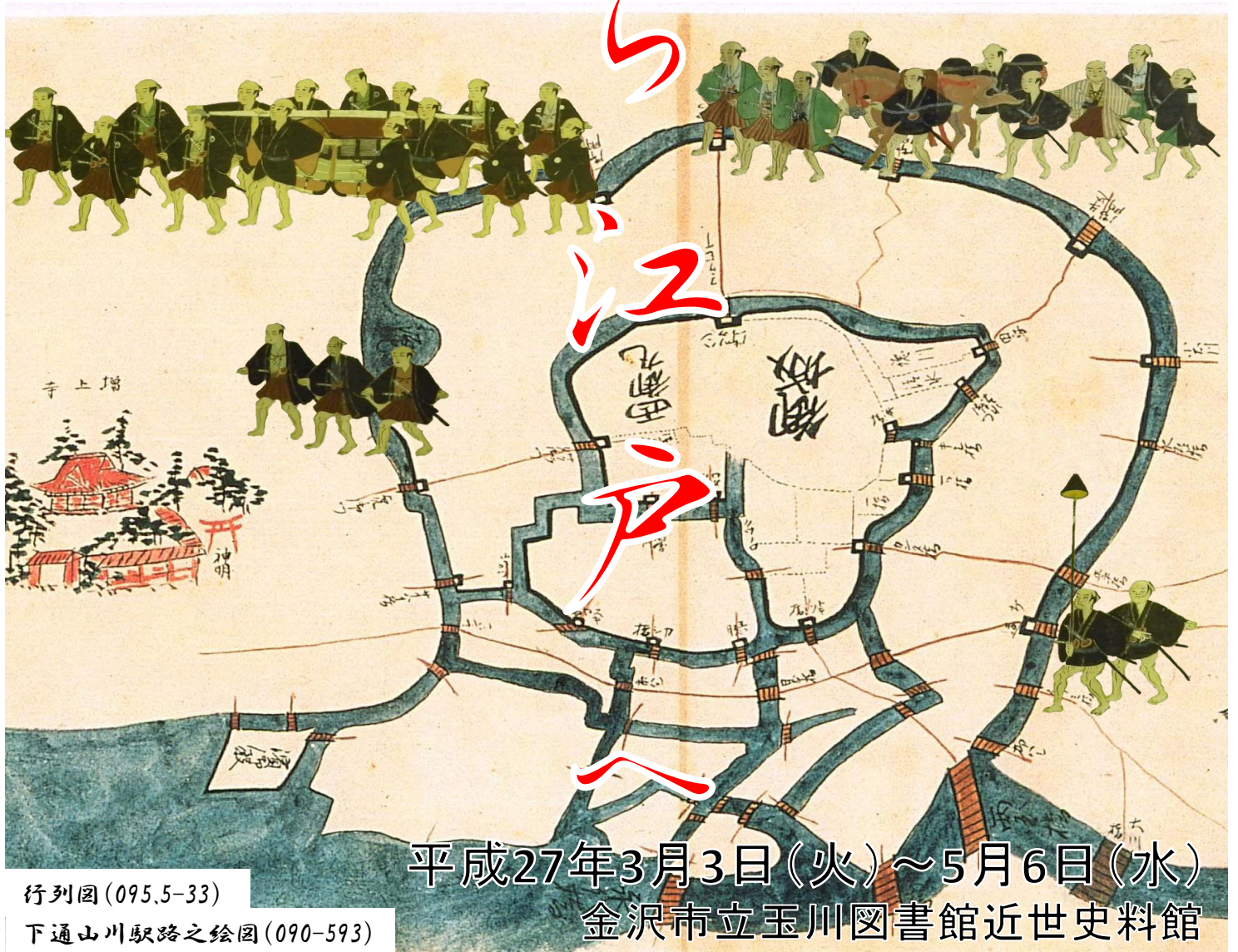
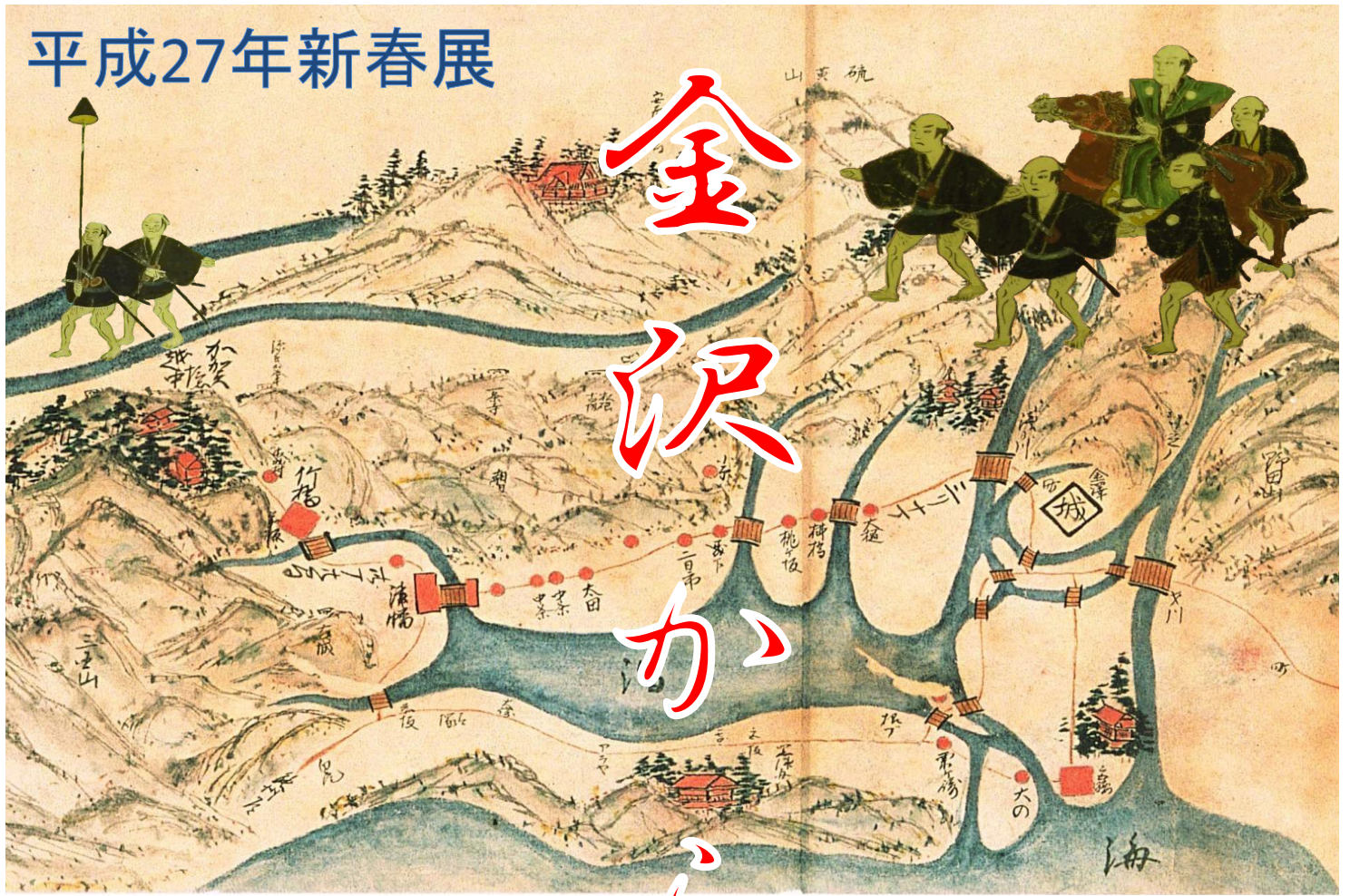


平成27年新春展



行列図(095.5-33)

下通山川駅路之絵図(090-593)

平成27年3月3日(火)~5月6日(水)

金沢市立玉川図書館近世史料館

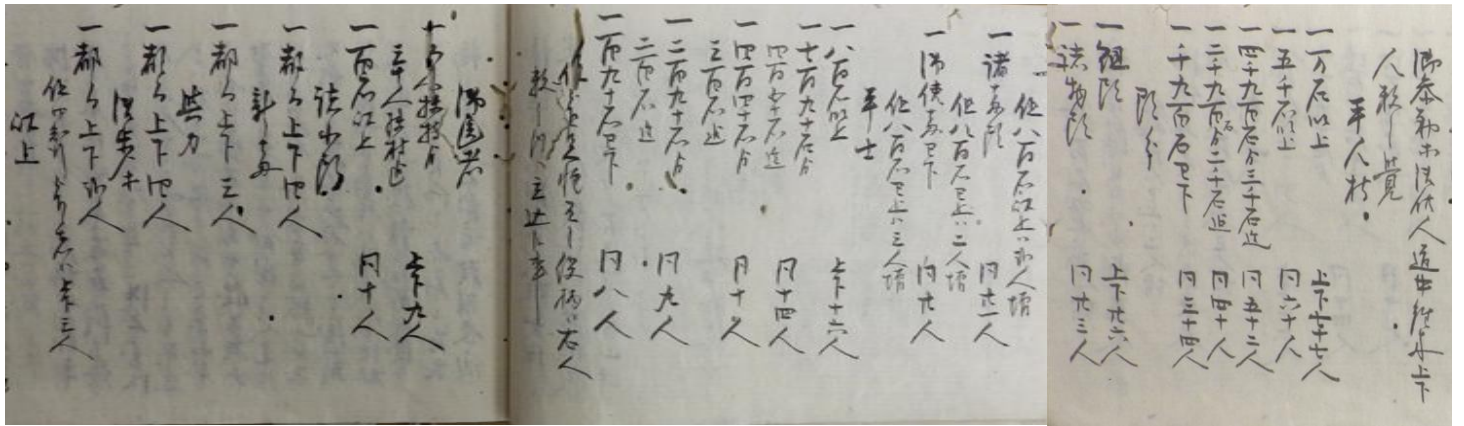
はじめに

寛永12年（1635）に発布された「武家諸法度」において、正式に参勤交代の制度が定められ、諸大名（藩主）は定期的に国元と江戸を往復することになりました。時代劇などの大名行列では、「下に～下に」というかけ声で、行列が通過するまで民衆がひれ伏すといったことが見られますが、そのように行列を組んで通行していたのは決められた区間だけでした。こうした行列に関わる道中の規定は多くありました。また、道中ではルートの変更などのトラブルや、道中で死去してしまう人もいました。

今回の展示では、そうした大名行列の実態、道中での出来事を「金沢から江戸へ」というテーマで、加賀藩の参勤（江戸へ）の史料を中心に展示しました。江戸へ向かう出発までの準備、道中や行列の様子などを文書・絵図から見ていきます。

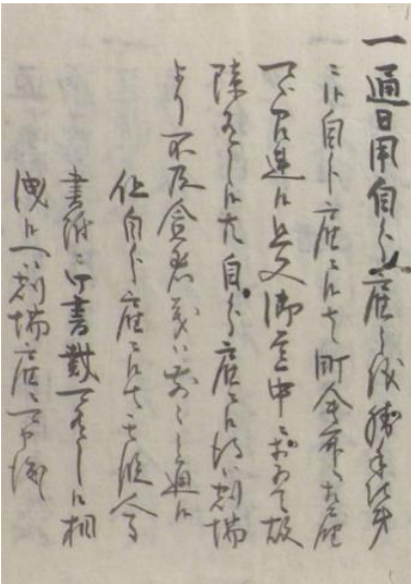
1. 準備

藩主が参勤のため、江戸へ向かうときには、多くの家臣が御供として同行しましたが、その家臣もまた御供（陪臣など）を連れていました。また、大名はもちろん御供をする家臣も、参勤は費用がかかるものでしたので、出発前にはそうした準備もしていました。

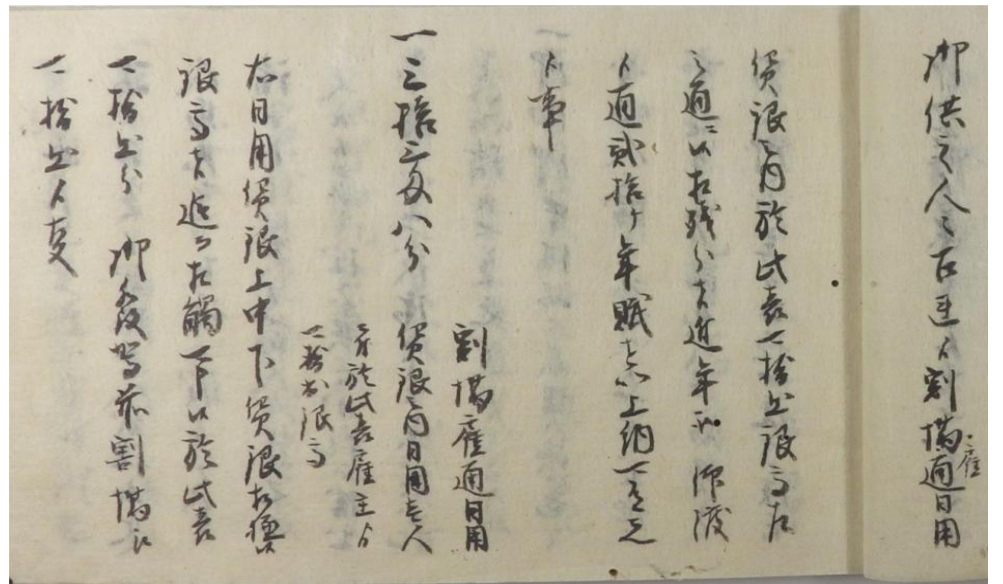


「御参勤御供被仰付候留」(16.22-101)

家臣が参勤で連れていくことができる御供の人数は、禄高を基準に決められていました。万石以上は77人、5,000石以上は60人、4,900～3,000石は52人などというように決められていましたが、実際は人数が前後することもありました。

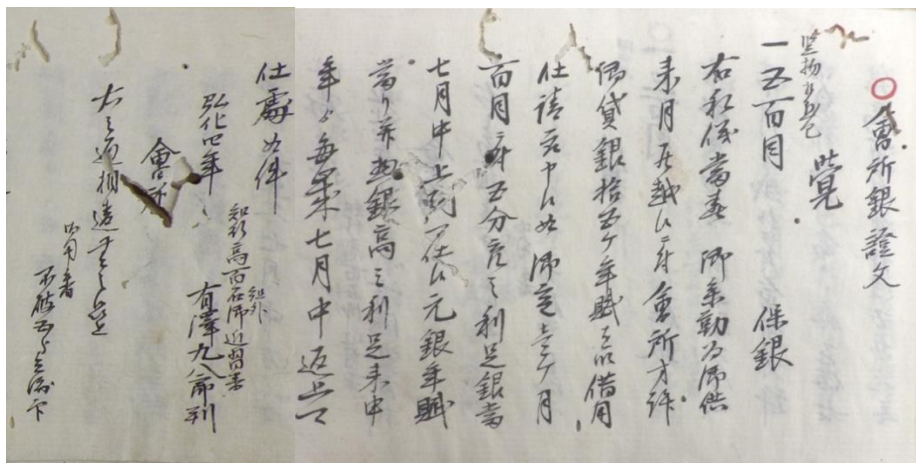


「御参勤御供被仰付候留」
(16.22-101)



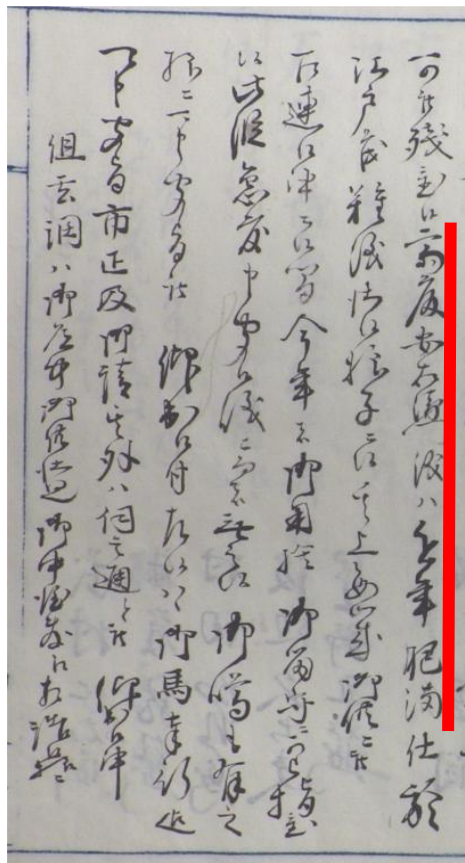
「御道中奉行等触留」(16.22-80①)

家臣は、参勤の御供のために通日用人と呼ばれる日雇人を召し抱えて、荷物持ちなどの仕事をさせていました。左上の史料から、通日用人を雇うためには、金沢の町会所へ届け出て、その者を連れてくる必要があったことがわかります。おそらく、金沢の町中に多く住んでいた稼ぎ人（町人身分）が通日用人として雇われていたと考えられます。こうした家臣自らが雇う通日用人の他に、割場雇通日用人という、割場（足軽などを管轄していた藩の機関）で採用された通日用人を召し抱える場合もあったようです。右上の史料から、この割場雇通日用人の賃銀は33匁8分であったことがわかります。



「御参勤御帰国御供被仰渡候留」(16.22-109)

藩主にとって参勤は、多額の費用がかかるものでしたが、その御供を命じられた家臣もある程度の費用を負担していました。そのため、藩は、江戸への御供、江戸詰などの御用を命じられた者に出銀を支給していました。それでも不足の場合には、家臣が会所から借銀をしました。これを会所銀といいます。この史料から、参勤の御供を仰せ付けられた有澤九八郎が会所銀を借用していたことがわかります。

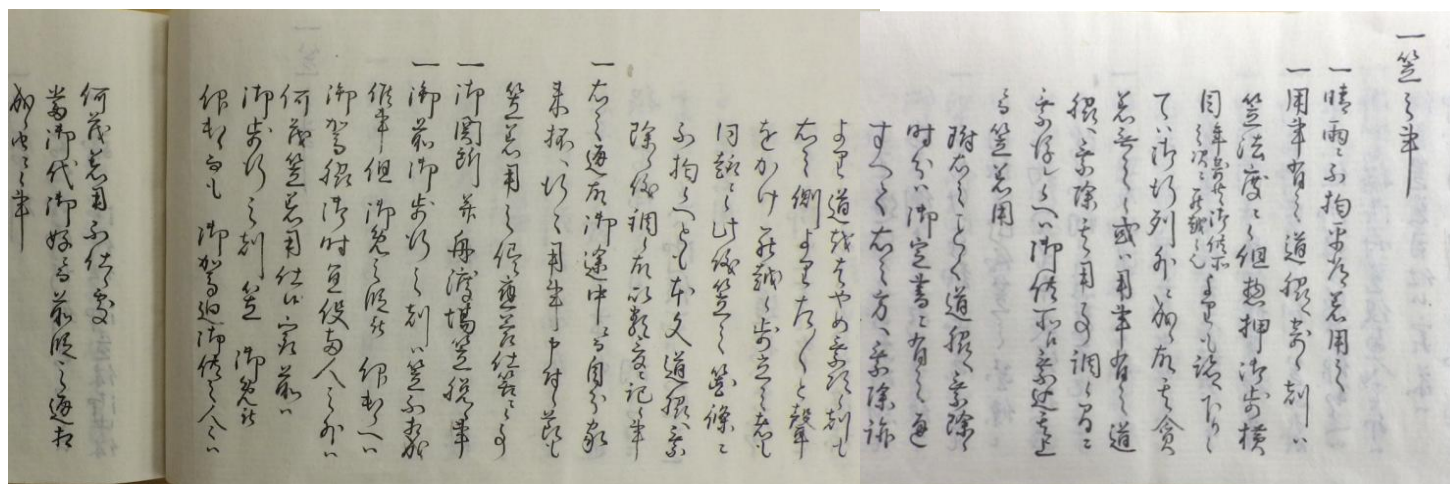


「護国公参勤覚書」(16.22-61①)

斉藤安右衛門は、参勤の御供を経験したことがある者でした。しかし、近年肥満となったことで、江戸でも不自由な様子があり、また、毎回参勤の御供を勤めていたことから、今回の参勤の御供は見送られ、御留守とされたようです。

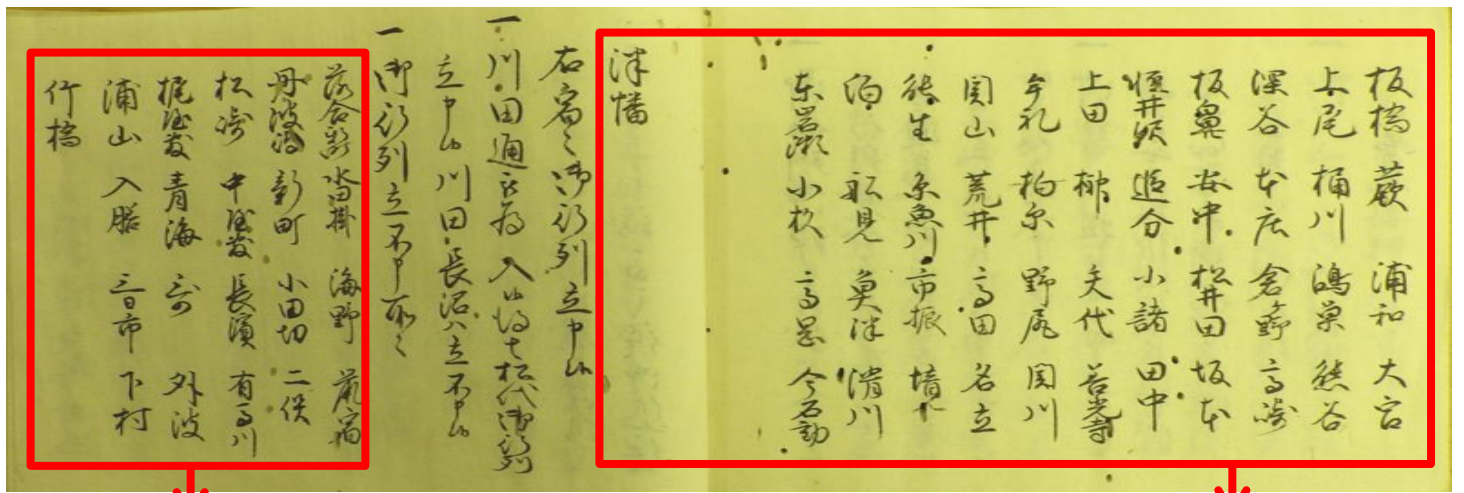
2. 道中

参勤の道中では、様々な規定があり、御供の者はそれに従いながら江戸を目指しました。例えば、「道中御供之定等」(16.22-42)からは、道中では、脇道にそれたり、行列本体から離れたりすることは禁止されていたことがわかります。また、茶屋で不作法に振る舞わないこと、買物代、宿泊代などを滞りなく支払うことなどが書かれています。以下で、道中の規定や、道中での様子を見ていきます。



「御参勤御供之覚」(16.22-41)

この史料によると、御供の者は晴雨に関わらず、笠を着用することが決められていたことがわかります。ただし、用事があり、行列から脇にそれる時は、笠を着用することは禁止されていました。その他、関所や船渡の時、藩主が歩く時には基本的に笠の着用が禁止されていました。

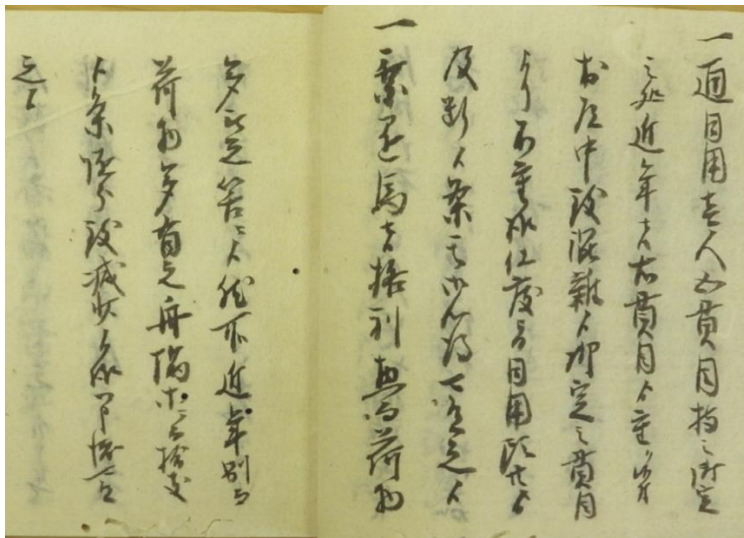


行列を立てなかった箇所

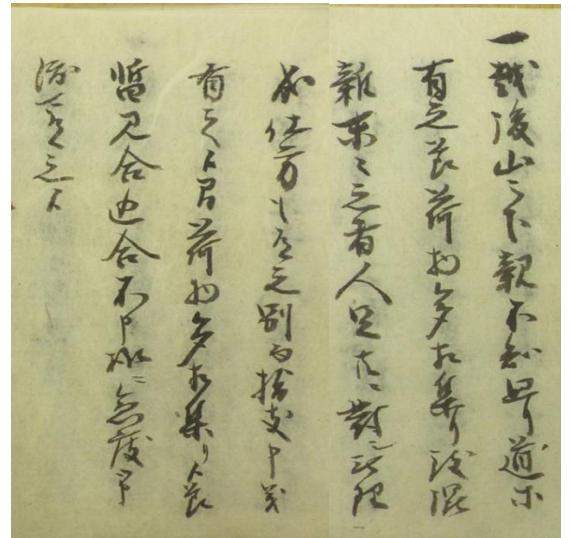
「御道中奉行等触留」(16.22-80②)

行列を立てた箇所

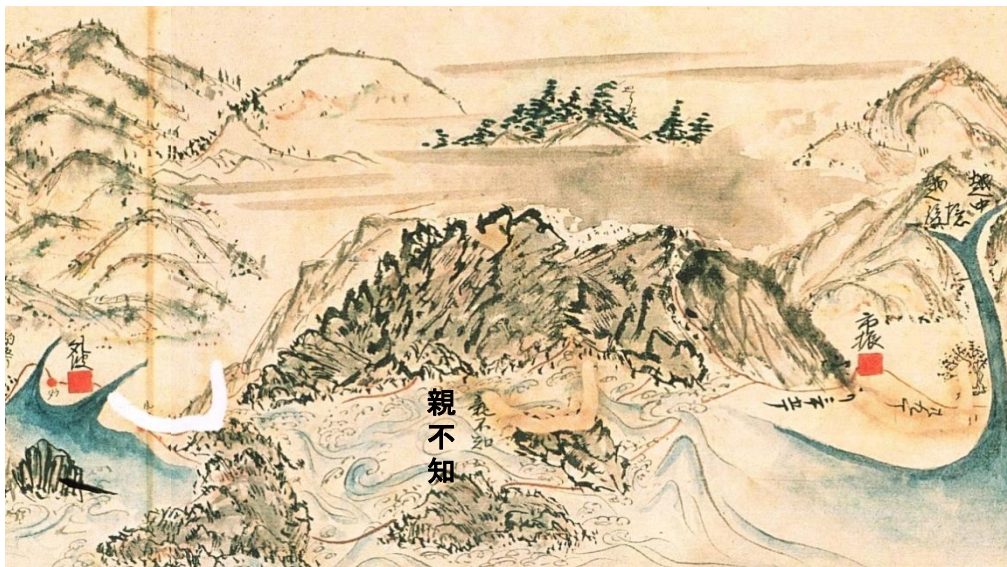
金沢城を出発した行列は、江戸に到着するまで、同じ隊形を保っていたわけではありませんでした。行列を組むことを「行列を立てる」と言い、行列を立てて通過する宿場・関所などは、事前に決められており、野間や農村部では、行列を立てずに一行はそれぞれのペースで歩いていました。上の史料は、帰国の事例ですが、参勤の場合も大きな変化はなかったと考えられます。



「御道中奉行等触留」(16.22-80①)



「御道中奉行等触留」(16.22-80①)

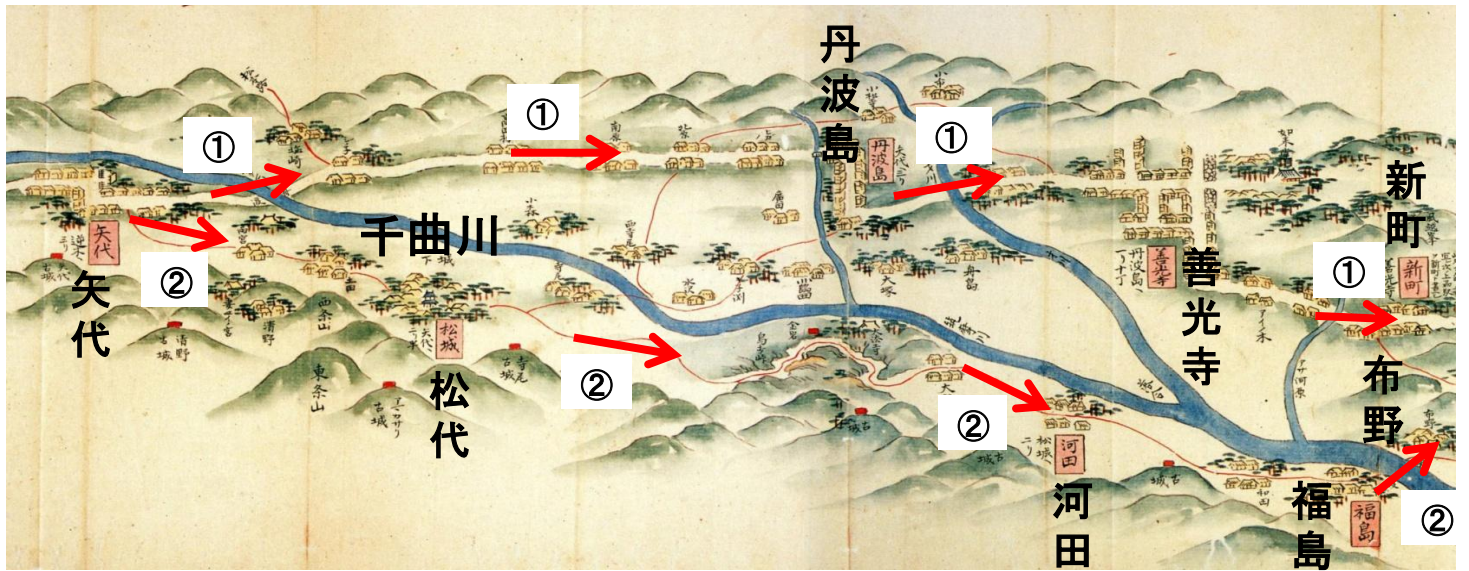


「下通山川駅路之絵図」(090-593)

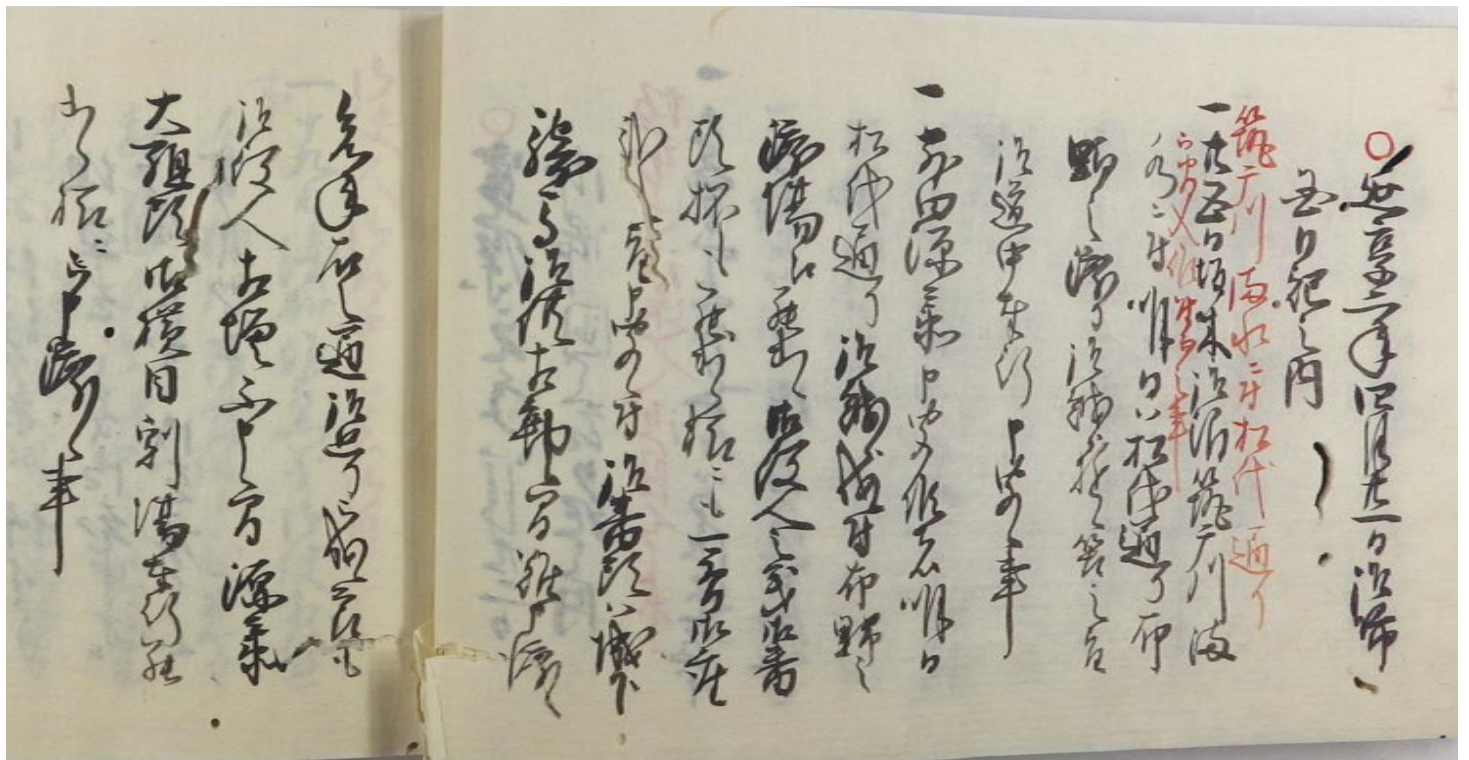
左上の史料から、通日用人（日雇人）に持たせる荷物の重さは、1人5貫目（約19kg）と定められていたことがわかります。しかし、それ以上の重さの荷物を持たせ、道中が混雑したり、船場などにおいて支障をきたしたりすることがあったようです。

右上の史料では、親不知で廻り道をする際に、荷物が集まり混雑するので（狭い道だから）、荷物が集まったときには、しばらく

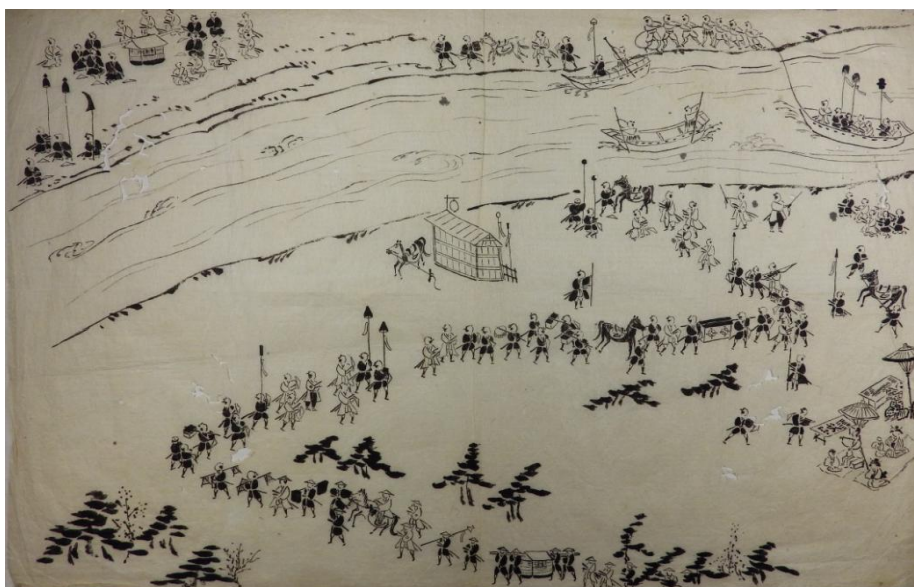
見合わせて混み合うことがないようにといった触が出されていたことがわかります。親不知（上絵図）は、道中の中でも難所と知られ、海岸線を通することから、天候により廻り道をするのがよくあったと考えられます。



「下道中絵巻」(090-379)

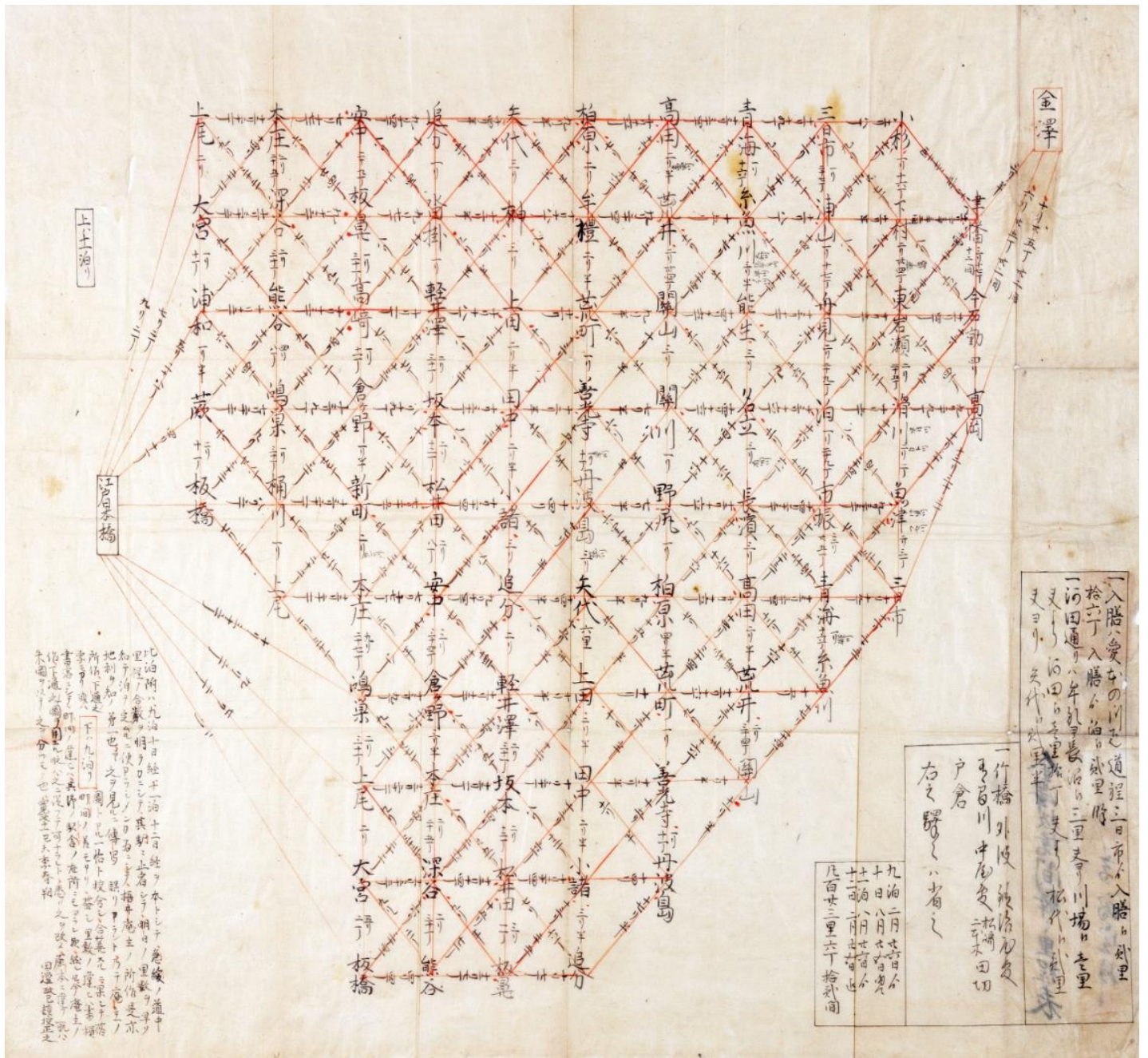


「御道中日記抜書」(16.22-44②)



「大名行列図」(大1230⑤「川越図」)

上の史料は、6代藩主吉徳と重熙（後の8代藩主）が、江戸から帰国した時の道中での出来事を書き留めたものです。千曲川が満水になっていたことから、通常使用していた①のルート（上の絵図）ではなく、松代城下を通り、福島から川を渡り、布野に入る②のルートを使用する案があったようです。川渡は、左絵図のように行われており、そのため川の水量（水勢）に大きく左右されていたと考えられます。ただ、結果的には、②のルートではなく、通常の①のルートを使用しました。



「金沢板橋間駅々里程表」(16.78-47)

上の史料は、加賀藩の兵学者有澤永貞が考案した金沢から江戸のダイヤグラムです。主要地間の距離が書かれており、廻り道や、経路を変更する際には、距離を計算するのに便利なものでした。

「宿割帳」(16.22-173)

左の史料は、御供をした家臣ごとの宿泊先が書かれたものです。史料右の年寄奥村内膳（禄高約12,000石）を見ると、内膳には142人の御供がいて、彼らの宿は「四十物屋市兵衛」であったことがわかります。この史料から、家臣の御供の人数が、先に見た家臣が連れて行ける御供の人数の規定より大きく上回っており、実際には規定が守られていなかったことがわかります。

3. 道中で死去した人々

御供をしていた家臣のなかには、金沢・江戸間の道中で死去した人々もいました。ここでは、そうした人々について見ていきます。



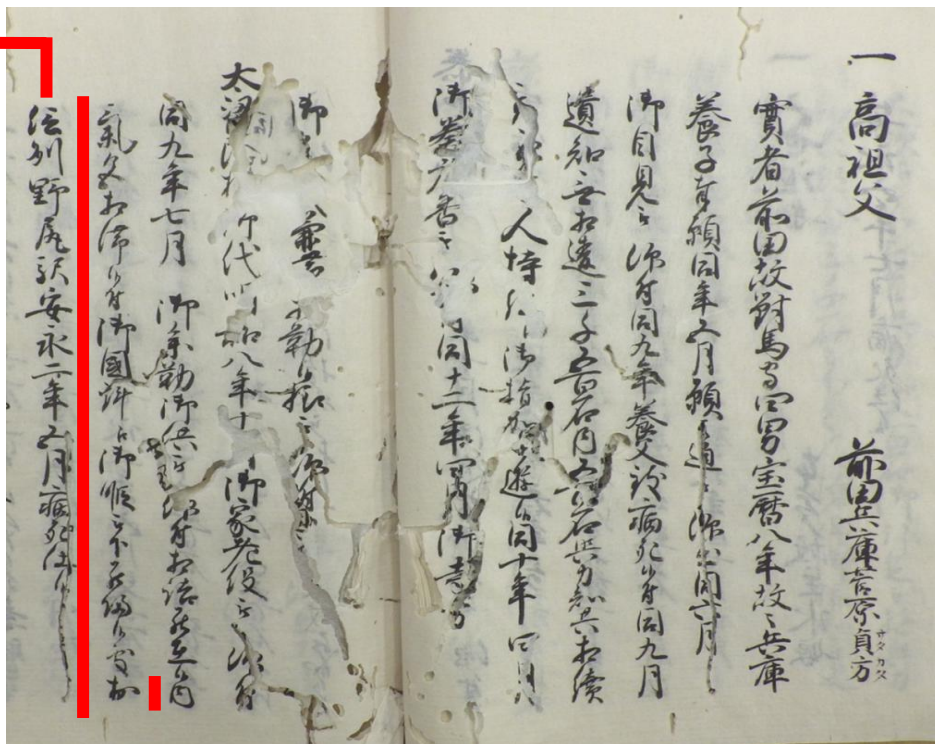
「下通山川駅路之絵図」(090-593)

長野県上水内郡信濃町にある真光寺裏墓地には、加賀藩士の前田兵庫貞方、諸橋権進（代々能役者の家柄）、福田八右衛門（300石。会所奉行などを勤めた）、岡田友左衛門（200石。勝手方御用、御台所奉行などを勤めた）の墓があります。これらの者は、いずれも野尻宿周辺で死去したものと考えられます。



真光寺裏墓地にある前田兵庫貞方の墓

於信州野尻駅安永二年五月病死仕候



「先祖由緒并一類附帳」前田橋三(16.31-65)

左の史料は、前田兵庫貞方の経歴を書上げたものです。貞方は、年寄の前田長種系6代孝資の4男でしたが、前田兵庫孝親の養子となり、跡を継ぎ、3500石を拝領し、奏者番や、家老などを勤めました。安永元年（1772）7月、参勤の御供を仰せ付けられ、家老の松平康済とともに、江戸へ向かい、7月25日に到着しました。そして、江戸に詰めていたが、体調が悪くなり帰国を許されて、その帰路の途中、野尻宿で病死（安永2年（1773）5月）しました。

参考文献

- 忠田敏男『参勤交代道中記—加賀藩史料を読む—』（平凡社、1993年）
- 『行列にみる近世—武士と異国と祭礼と—』（国立歴史民俗博物館、2012年）
- 『ナウマンゾウと一茶—北国街道とそれ以前の道—』（野尻湖ナウマンゾウ博物館・一茶記念館、2014年）

【付記】真光寺裏墓地にある加賀藩士の墓に関しては、明治大学 研究・知財戦略機構の中村由克客員教授（黒耀石研究センター）のご教示・ご協力を得ました。